

昭和56年11月

夏の思い出……………平岡敏夫……………一

研究室だより……………三

卒業生だより……………四

住所録・名簿……………九

平岡敏夫

1

それぞれに夏の思い出を抱いて、みんなは学園に帰ってきた。九月はじめだったか、NHKがテレビで、ふたたび若さがよみがえってきた筑波大学構内をうつし出していた。行き交う自転車。間引き運転から平常にもどったキャンパス。バスが遠ざかって行く。バスの窓から道ばたの松林のかげに、今年もまた、野はぎのこぼれるようなつぼみと花を見つけたよるこび。大気は冷気を帯び、かえで通りは、はやくも紅葉を見せはじめている。「あかあかと日はつれなくも秋の風」とうたわれた日ざしも、なつかしくさえ思われる。私は、荒川沖へと向かう夕日のバスのなかで、私なりに夏の思い出を描く。熱い瀬戸内の日ざしのなかで、子供のときからいつも眺めていながら、一度も行ったことのない小島―牛島へ行ったことが思い出される。牛がはらばいになったように、頭もあれば尾の部分もある牛島。

2

舟からあがると、丸尾五左衛門の屋敷跡を探した。瀬戸内海の大船主、ほとんど江戸全期にわたって、海運上の利権を握り、代々

五左衛門と称し、延宝七年（一六七九）には一万一千百三十石、元禄十六年（一九〇三）には一万一千二百石、といった記録がある。これは千石船をはじめとする持船の総石数であるが、探しあてた廃墟に立って、すぐ下の海を眺めわたしても、それらの船影は、想像だにできない。小学校の分校すら廃校になり、いまは塩飽勤番所の残る本島に、数人の児童が朝夕、舟で通学しているという。

波止場へ引返そうとする私たちを老人が呼びとめる。老人が案内したのは、夏草が繁りに繁る廃寺であった。寺名は極楽寺。山門を入ると一面の草で、その向こうに、今なお金色の光をとどめる観音堂のいらかの先端がほの見える。鐘楼の鐘には、延宝何年の銘があった。夏の日ざしとむせるような夏草と、その上をすぎて行く鐘の余韻。老人はこの鐘の音色をたたえてやまない。

かつて盛況をきわめたはずのこの無住の寺。寺の境内から見えたはずの無数の船影。すべてはまぼろしである。老人は、荒れたわが家の庭に誘い、はては、大船の梶棒の巨大な軸が今は梁となっているのを見せた。ここでは近代とは、まさにほろびの時代であり、人も船も寺も、すべてはただ消えて行くばかりである。歴史を発展としてとらえる史観はむろんぬがかたくあるが、一方、今は、人の心に巢食う終末感も消しがたい。十万吨、二十万吨のタンカーが、時折、牛島の岬をかすめて過ぎて行く。あそこには、日本の「文化」を保証するはずの油が満載されており、こちらには、廃墟があり、廃寺があり、廃校がある。

3

かつて、瀬戸内海を山口へと帰郷する青年独歩は、小島の浜に何かを拾って歩く男の姿を小さくなるまで船上から見送った。東京専門学校（早大の前身）を中退したばかりの独歩にあった、東京という大都会と瀬戸の小島、そして名も知らぬ男の影。人類の真の歴史を山林海浜の小民に問おうとした独歩が、筑波で、九月から続ける「特講独歩」のなかで、夏の思い出とともに私によみがえってくる。忘れえぬ人々のひとりとして、私にも牛島の老人のおもがけが浮かんでくるのである。

夏がくれば思い出す、はるかな尾瀬、遠い空——この歌はよく知らぬなりに私も好きだが、たんなる都会人の一般的郷愁といった次元でもあるだろう。私は、私の生い立った瀬戸内海の、今なお訪れたことのない島々を、牛島の夏の思い出とともに思い出す。自分を育てあげた父祖の地、故郷。年のせいでもあろうけれども、「この夏かいた水彩画、今出して見て夏恋し」と小学五年の国語で習った、だれの作とも知らぬ詩の一節とともに、牛島が夏の水彩画のように、忘れがたく思い出されてくるのである。